

“鏡”の論理から“魂”の論理へ

——人間記号論序説——

西 勝 忠 男

何という かなしいものを
 人は 創ったことだろう
 その前に立つものは
 悉く 己れの前に立ち
 その前で問うものは
 そのまま 問われるものとなる
 しかも なお
 その奥処へと進み入るため
 人は更に 逆にしりぞかねばならぬとは

——高野喜久雄「鏡」——

目 次

はじめに

1. 「人間とは何か」
2. 「魂」の定義
3. 〈ことば〉という鏡
4. 「魂」論批判
5. 意識の論理分析
6. 観念・ことば・記号——ロックとパース——
7. 「インタープリタント」としての魂

はじめに

1866年の秋、ボストンにおいて12回にわたって行なわれたローウエル・レクチュア Lowell Lecture は、「科学の論理；帰納と仮説」The Logic of Science ; Or, Induction and Hypothesis と銘打たれているにもかかわらず、第11回目¹⁾の講義では、意外なことに、「人間とは何か」という、いわば形而上学的な問いが提起されている。しかも、その答としては、これまた極めて率直に、「人間とはシンボルである」と断定されているのである。この時パースは27歳の若さであった。

この講演は、私が先きの論文²⁾で取り上げたパースの「四つの能力否定から生じる諸帰結」Some Consequences of Four Incapacities が出される2年前に行なわれたものであるが、いまこの講演の草稿を読んでもみると、実に多様な今日的諸問題——人間、意識、身体、オートマトン、ロジック、人類学、言語、記号など——がレリヴァンスなかたちで示唆されているばかりでなく、その論点は最新の知見とも齟齬していないことに驚かされる。

このような驚きは、一つには私が、パースの哲学を下敷きにして問題点をとらえようとする、いやむしろ、パースの中に読み込んでいこうとしている態度からくるものであろうし、あるいはまた、私自身の知見に偏りがあるためであるかもしれない。しかし今日、パース哲学の、類いまれに見る独創性と包括性とは、疑いもなくエスタブリッシュされており、殊に、隆昌の極みにあるともみえる記号論的な諸論議において、記号論なるものの存立を、その根底から考察しようとするならば、彼を措いて正当に考えることさえできない、というところであろう。そこで、パースの〈人間＝記号〉論なる哲学的見解を採り上げてみるのが、現行の記号論論議にいくらかでもプラスとなるのではなかろうか、とおもわれるのである。

さて、昨夏（1984年）のこと、書店で“*Man's Glassy Essence*”なる表題を有する人類学の書物を手にしたとき、私は微妙な喜びを経験した。果たして私の直感したとおり、この表題はシェイクスピアの『尺には尺を』に出る名句

であるのだが、にもかかわらずこの句が、シェイクスピアの《人間学ないし人類学》というような——興味深いテーマではあろうが——ものに係わるのではなくて、実は、私も探索していたパースの、《人間＝記号》論なる文脈から採り出されたものだ、ということであった。この書名によって私は、「してやったり！」とわが意を得たことは言うまでもないが、同時に、〈記号人類学〉**Semiotic Anthropology** なる副題に打たれ、学問の新鮮な展開にしばし感あり、というところであった。

1. 「人間とは何か」

まず、このローウェル講演におけるパースの「方法」に注目することから始めよう。彼は、知的企てとしての哲学が、実りあるかたちで行なわれうるための、唯一の仕方ともいべきものがロジックによるものであることを主張し、ロジックを形而上学的方法にとって代わるものとして選び取る。しかしこのことは、形而上学を軽視する世の風潮に乗っているわけでは勿論ない。それは、形而上学を軽視して、形而上学的思考の訓練に欠けている人ほど、実際には形而上学理論の「万力に捕らえられてしまう」³⁾ (p. 490) という皮肉な結果になっているのだから、迂闊に形而上学を勧めるわけにはいかないのである。しかるに、どんな人でも、事物に関する一般概念をもたねばならぬ以上、そのような事物一般の形而上学的概念については、きわめて慎重に構成されねばならない、ということになるのである。

ところで、ロジックはなぜ重要なのか。それは、なによりもまず、われわれの持っている意識なるものが、「推論」**inference** というロジックのかたちをとってはたらいっているからなのである。すなわち、われわれの「意識は、その変容のすべてが推論であって、それゆえに、すべての推論が妥当な推論なのだ」(p. 491) という立場——パースの《ロジシズム》**logicism** ともいべきもの——に基づいているのである。そして、そのような推論は、(1)知的推論 **Intellectual inferences**, (2)知覚判断 **Judgments of sensation**, 及び(3)習慣 **Habits** に三分され、知的推論はさらに仮説、帰納、及び演繹に三分される。一方、意

識は(1)感情ないし内的要因，(2)努力ないし外的要因，及び(3)概念ないし情報要因，というように分類されることになる。(p. 491)

このように，推論においても意識においても，早くもここに，パースの思考法における十八番ともいべき三分法 *trichotomy* が，殊に意識の分類においては，後の現象学的カテゴリーの萌芽が，見られるのである。しかしここでのパースは，これらの分類を取り上げて，これに説明を加えるようなことはなにもしていない。それよりも，「人間とは何か」の大問題——「高貴にしてよりプラクティカルな形而上学的問い」*a loftier and more practical question of metaphysics* (p. 491)——に対して，いかにロジックを適用して，解答への道を見出すかという，当面の関心事に向かって行くのである。

2. 「魂」の定義

さて，〈人間〉の問題へのロジカル・アプローチはどのようになされるのか。それにはまず，〈人間〉なるものがどのようなものとして提示されようとしているか，から入って行かねばなるまい。ここでパースは，事も無げに「人間は本性上魂なのだ」*Man is essentially a soul* (p. 491) というテーゼを掲げることから始める。人間を〈魂〉としてとらえることは，ヴァリエーションの差こそあれ，古来どのような民族においても行なわれていることであって，このこと自体きわめて常識的一般的に，承認されている通念だといえよう。そこで問題は，その〈魂〉なるものがどんなものとして考えられているか，ということになる。〈魂〉とは「空間における数学上の一点を占め，思考そのものではないが，思考の固有の主体であり，分割できず，意欲とよばれるある種の有形な力を発揮するもの」(p. 491) だ，とパースは規定する。

しかし，これでは「魂」を，ライプニッツの「モナド」，ないしはロックの「心」と大差なきものとしている，と見なされてもやむをえないかもしれない。しかしパースは，実はこのような「魂」が人間の本性であって，「すべての人が，いつでも，どこでも，多少の差はあるにせよ，それぞれはっきりと，とらえている」(p. 491) 人間の姿だ，というのである。このように，「万人のとら

えている」という点が大切なことであって、〈哲学〉なるものを、万人の、すなわち常人の、なにげない世界の中に置き、そこから一步一步、知の体系を築き上げていこうとするパースの、常識主義的態度を読みとることができるのである。

ところで、〈魂〉のこのような規定に続けてすぐに、意外なことに、『尺には尺を』*Measure for Measure* におけるイザベラの次の台詞が、それと告げることなく、掲げられるのである。

鏡のごとき^{おの}己が身の

身の程さえもわきまえぬ⁴⁾ (第Ⅱ幕, 第2場, 119-20)

Most ignorant of what he's most assured

His glassy essence

——これが〈魂〉であるところの人間の本性だというのであろうか。まことに文学的で、イマジナティブな捉え方をしているものだ、といえるのではなからうか。しかもパースは、この台詞を、同じ講演の中で二度までも、引用しているのである。このことは、いったい何を意味しているのだろうか。シェイクスピアのこの一断章は、パースの人間観を、いやむしろ、パースの「人間なるもの」へのアプローチを示すに最も適切かつ簡明な章句であり、また、彼の〈人間=記号〉論の思想を展開する原点ともいうべき、最も基本的で象徴的な言明だと思われるのである。

ところで私は、逍遙訳⁵⁾にも、小田島訳⁶⁾にも、敢えて異を唱えるがごとき拙訳を試みたのであるが、ここはどうしても、「鏡」でなければならないと考えるがゆえなのである。ご両所の訳にも示されているように、たしかに人間とは脆きものであって、どんなに強がってみても、所詮は些細なことによって、がらりと変わったり崩れ去ったりしてしまい、もとの影も形もさらに留めえない、はかない存在ではあるだろう。さらにまた、多義的解釈を許容するシェイクスピア劇においては——まして相反する解釈を生む問題劇の一つ『尺には尺を』であるからには——ダブルイメージで捉えなければ、複雑な人情の機微に触れたドラマのおもしろさはわからない、ということも確かであろう。したが

って、ここでは、「堅くも脆き（ガラスにも似た）己が身」と「鏡のごとき己が身」とのダブルイメージで解釈するのがよいのである。——にもかかわらず、言挙げする人間の、身の程知らぬ愚かさを衝いた句であることに狙いを定めると、やはり、「鏡」がよいのではないかと思うのである。しかも、なによりもこの句を、自分の〈人間＝記号〉論のテキストに、好んで引用しているパースの意図と、〈人間＝記号〉論そのものの論理とを考え合わせると、この‘glass’は「鏡」以外のなにものでもありえないことになるのである。

——パース自身は、この講演の中でも、他の所でも⁷⁾、この台詞そのものについてなんの説明も与えていないし、ましてや解釈らしいものはなにも示してはいない。それゆえ、先きほど指摘したように、まさにこの台詞は、〈人間＝記号〉論を構想するための原点として、つまり、他の命題による説明的定義を必要とせぬ公理のごときものとして、定礎されている、としか言いようがない。それはまた、人間を考え、人間を検討するための起点ともなり、己れを省みるための道しるべともなるものである。

3. 〈ことば〉という鏡

さてそこで、〈人間＝記号〉論の論理とは何か、ということになる。それは端的に言って、まず「鏡」の論理であり、次いでそれは、「魂」の論理へと吸収され、展開されなければならない。この《論理》は〈人間＝記号〉論に向けた私の解釈の一つなのである。

シェイクスピアの描く人間世界においても、はたらくものはといえば、もとより〈ことば〉であるから、シェイクスピアは〈ことば〉の世界を描いているのだといえる。さて、手がかりを先きほどのイザベラの台詞に求めよう。〈ことば〉という〈鏡〉に映し出されているものは、単に〈ことば〉であるのみならず、実は己れの姿であるのだが、その〈ことば〉を吐く当人には、それがそのまま己れだ、とは覺りえないのが世の人びとの有り体である。

人はみなそれぞれの〈鏡〉をもっている。〈ことば〉と〈こころ〉——いや〈意識〉と言っておいた方がよいかもしれないが——である。その〈ことば〉と

〈こころ〉を、己れとの係わりでいえば、〈ことば〉は己れを外に映し（移し）出す、つまり外化する〈鏡〉であり、〈こころ〉は己れを内に省みる〈鏡〉である。それゆえ、〈ことば〉という〈鏡〉に映る己れは外化されたものだから、だれの目にも留まる、つまり「万人のとらえ」うる己れである。にもかかわらず、その己れが、己れのうちなる〈鏡〉すなわち〈こころ〉において、〈ことば〉に映し出されている己れを、己れとして映し出してみることがなければ、己れは、己れをとらえることができず、己れを知らない、ということになる。〈ことば〉が己れの〈鏡〉になっているのだという自覚がないのである。真の自覚とは己れの内において己れを知る、ということであろう。

しかしまた、このように〈ことば〉として対象化されたものがそのまま己れだとは認めないことにも、それなりの理由はある。すなわち、〈ことば〉として発したものは己れのあらわれ、己れのコピーではあっても、己れそのものではないからだ、というのはむしろ、通常のとらえ方である。己れとは、つまり人間とは、〈ことば〉を己れとして発するような、はたらきをもった主体、すなわち意識だというのである。しかしながら、発した〈ことば〉によって己れが分かるのであり、また、己れが分かることによって変わりもするものが己れなのである。パースは〈ことば〉と己れ、つまり人間、との相互教育ということを説いている（p.496）。やはり、〈ことば〉は〈鏡〉の役割を果たしているのである。

4. 「魂」論批判

さて、〈魂〉としての人間が〈鏡としての本質〉‘glassy essence’を有するものだとすれば、そのような〈魂〉は、「意識」とどのような係わりをもつのであろうか。

先きに見たように、パースは意識の変容を、すべて推論としてとらえているから、〈魂〉に関する紛々たる諸説の出現は、論理的な混乱を示すものに外ならない。〈魂〉に適用されるロジックの誤りだということになるのであるが、それはどのようなことであろうか。

パースはすでに、推論を三つの部門、すなわち仮説、帰納、演繹に分けていたことを見たが、従来の〈魂〉論の誤りというのは、「人間の生の事実を説明するのに、帰納による説明と仮説による説明とが正確に区別できていないこと」(p.492)にあるという。そこでパースは、帰納推論は主題の拡大を推し進めるものであるのに対して、仮説推論は述定を深めようとするものだ、との注目すべき発言をする。この二つの推論はともに、〈人間〉に関する諸現象の説明には欠くべからざるものではあるが、その役割分担はまったく異なるのだ、というのである。これら二つの説明法は、操作による帰結の出しやすい自然科学においてさえ論争を生ぜしめるのに、人間に関する諸現象に関しては決して両立するものではない。まして、〈魂〉の探究においては、両者の混同はあってはならぬことだ、とパースは警告する。

それでは、帰納と仮説というこれら二つの推論が、〈人間〉に対して、〈魂〉に対して、どのように適用されていくか見ることにしよう。まず、仮説による説明とは、外的、客観的にであれ、内的、精神的にであれ、人間諸現象の原因を解明したり、必要条件についての情報を与えたりするものである。この説明法は〈人間〉の本性に関する仮説を提出しようとするものだが、たとえば生理学者であれば、当然、外からの方向をとって、〈人間〉はオートマトン(自動機械)の一種だ、というようなことになる。このオートマティズムにおいては、たとえ〈人間〉における意識の存在を認めるとしても、意識とは物理的諸条件に従うものにほかならないと考えるから、このような思考は結局、「自然は統一である」‘nature is uniform’ という要請に基づくことになってしまうのである。しかしこの要請は、〈人間〉とは責任を全うしうるものだとか、不死なる〈魂〉を有するものだ、とかいうような思想とは矛盾せざるをえないのだ、とパースは言う。(p.493)

こうして見ると、外からの仮説による説明は、どうしても、人間の本性とされるものに見合う対応物を、いわば《人間もどき》を、作りあげることになるのであって、このようなモデル的思考法による成果は今日ますます大きなものになっているとはいえ、パースは、このような方向をとる人間観にはあまり期

待をかけていないように思われる。したがって、大脳生理学者が「魂の在りかを大脳の中のピンの頭ほどの小さな器官に求める」(p.498) ような《局在説》を批判して、同じく外に向かう探究をするにしても、人間の〈魂〉なるものを、「人間の身体を含めた全体にくまなく」(p.498) 認めようとする人類学者の研究の方が、はるかに合理的だと評価するのである。

それでは次に、内的、つまり内からの方向をとって、〈人間〉の問題を「責任」や「不死」の問題としてとらえるとする、どうであろうか。今度は、どれだけ多くの学説が、古来、立ち現われてきていることであろうか。それらは互いに錯綜し紛糾していて、問題は混乱し、曖昧さを増すばかりである。しかも、「これらの学説が基本的に誤りだとは言いがたい」(p.493) のであるから、決着をつけることは至難のわざであろう。詮ずるところ、それらの学説は宗教的な役割を、つまり、人類に希望を与えるというはたらきを、果たしてきたものであるから、それら学説間の調和を急ぐことはなかり、とパースは言うのである。

5. 意識の論理分析

以上、人間本性への、仮説推論による説明法について考察を進めてきたが、外的にも内的にも、いずれの仕方においても成功を見ることはなかった。ところがここで、パースは「人間とは何か」の問いが求めているものは、実は帰納推論による説明であって、それには「内的な考察」(p.494) が必要なのだという。すなわち、「筋肉や腺や神経繊維ではなくて、もっぱら、感情や努力や概念を考察」(p.494) しなければならないというのである。かくして初めて、彼自身の仮説が、言い換えれば、〈人間=記号〉論における基調命題である「人間はシンボルである」(ibid.) が宣言され、この言明が帰納によって立証されていく手続きが明示されることになる。

それは先ず、次のような論証によって始まる。すなわち、パースによれば、感情や努力や概念は意識の状態であって、意識はすべて推論である。生きるということは、一連の推論ないし思考のはたらきにほかならない。人間はどの瞬

間をとっても思考するもの——連続的なもの——であって、思考はシンボルの一種であるから、人間はシンボルだ、ということになる。このように〈人間＝記号〉論は先ず、意識の記号論として始まるのである。

この〈人間＝シンボル〉論は、もう一つの有力シンボルである〈ことば〉との対比によって、すなわち、〈人間＝シンボル〉と〈ことば＝シンボル〉との対比によって、さらに明確なものにする必要がある。パーズは直ちにこれを試みているが、これによって、〈人間＝記号〉論の原型となるべきものが展開されることを期待できるであろう。しかし考えてみれば、〈人間〉と〈ことば〉とが対比されるということはおかしなことでもある。〈ことば〉は〈人間〉によって生み出されたもので、人間の文化の一形態にすぎないものともいえるであろうから。しかしまた、〈ことば〉は〈人間〉から生み出されるやいなや、〈人間〉とは独立なものとして、こんどは、〈人間〉にはたらきかけてくるものでもある。それゆえ、この対比はどこまでも〈人間〉なるものを明確にし、その本性をとらえるための有力な手立てとして考察されなければなるまい。

パーズは〈人間〉と〈ことば〉との差異点として、まず、身体 *body* と意味 *meaning* の二つをあげる (p. 494)。〈人間〉の身体はすばらしいメカニズムで出来ているが、〈ことば〉のそれは、たとえばチョークで書かれた線である。また、〈人間〉のもつ意味は謎に満ちているが、〈ことば〉のそれは単純である。これらの差異は目に見えたものであるが、もう一つ、「意識」についてはどうであろうか。〈人間〉は意識を有するが、〈ことば〉はそうでない。これは一目瞭然のことだと思われているのだが。しかし「意識」とはいったい何であろうか。パーズは「意識」のはたらきを、次のように、三つのカテゴリーに分類する。

「意識」はまず、生きものとしての感情 *emotion* であり、感覚 *sensation* である。感情や感覚は、動物としての、有機体としての、人間の身体との係わりにおける意識であって、このような意識はむしろ、「無意識的な模倣力」とでもいうべきものであるから、〈ことば〉はこれを所有しえない。しかしながら、感覚にせよ感情にせよ、「われわれの内なる心の〈ことば〉」(p. 495) であるよう

に、「〈ことば〉もまた、まさしく書かれた感情」(p. 495) なのではないか、とパーズは言うのである。

次に、「意識」とは認識 *knowledge* であって、「われわれが心の中に抱いているもの」‘*which we have of what is in our minds*’ (p. 495) である。そして、「われわれの思考のはたらきは一つの指標 *index* であって、完全な自己同一性 *identity* を目指そうとするものである」(p. 495)。しかるに〈ことば〉もまた自己同一性を目指す指標であって、この点では〈ことば〉と〈人間〉との相違はない。

第三に、「意識」とは「われ思う」‘*I think*’ を、すなわち「思考の統一」*unity of thought* を示すものである。「思考の統一とはシンボル化 *symbolization* (記号化) における統一、すなわち、矛盾のないこと *consistency* にほかならない」(p. 495) のである。この「矛盾なきこと」は〈ことば〉もまた所持している特性なのである。

こうしてみると、〈ことば〉と〈人間〉、すなわち〈ことば〉と〈人間意識〉とは区別しがたい関連をもっている、と考えざるをえないであろう。そこで、「われわれは、〈人間〉と〈ことば〉とを、見分けてもいないのに、見分けているつもりになっているのだろう」(p. 495) とパーズは言うのである。そして再び、先きほどのシェイクスピアの台詞が——ただし、*he* を *we* に、したがって *his* を *our* に言い換えて——引き合いに出される。あたかも、〈ことば〉が〈己れ〉だとは覚えぬのが人間意識の特性であるかのように。しかも、〈ことば〉は、意識の中に歴然と存在しているように見えながら、なおかつ、意識を越えた自らの存在を主張するものであることを、当然のこととして認めるかのように。

6. 観念・ことば・記号——ロックとパーズ——

以上の意識三分法は、まだプリミティブなものであるとはいえ、後のパーズ記号論における「類像」*icon*、「指標」*index*、「象徴」*symbol* の三分法⁸⁾を予想させるに十分である。記号とは本来、〈人間〉の意識と結びついたものであ

って、それなしに記号は記号でありえないであろう。〈人間〉がとらえ得た現象のみが記号としての意味をもつのであるが、しかしそれは、〈人間〉がそれを記号として自覚したうえのことである。己れの〈ことば〉という鏡に映る影を己れとして見ることができなければ、「怒れる猿にも等しい」⁹⁾ 哀れな存在となるのである。

意識の分析として展開された〈人間＝記号〉論は、また、人間と「もの」との連関をとらえる理論としての「認識論」の特性をも持っている。認識論という側面から見ると、パースの記号論は、ロックの認識論——それは同時に記号論としての役割を果たすものでもある——に著しく類似している。これは注目に値することである。むしろ、ロックの認識論ないし記号論がさらに展開されるとすれば、その一形態はパース記号論になるとも考えられる。そこで、ロックとパースの対応関係を求めてみよう。

先ず、ロックにおける人間経験の戸口としての感覚は、パースにおいては意識としての感覚ないし感情としてとらえられている。そこでは感情は、「身体という有機体に依存している」(p. 495) のものであって、身体なしに感情はありえないことなのである。また感覚は、これを「心の記号」mental sign としてとらえることのできるものなのである (ibid.)。

次いで、パースにおける「認識」なるものは、「心の中に抱かれていますもの」(p. 495) (圈点筆者) であった。この「“もの”が心の中にある」ということは、〈“もの”が観念として心の中にある〉ということであって、これをロックの考えに直せば、観念は“事物”の、すなわち外的存在の、記号だということになる。ロックにおいては、“事物”の記号は「観念」であり、「観念」の記号が〈ことば〉なのである。ともあれ、パースの「認識」もロックの「観念」も、ともにその役割は、対象を指示する指標としてはたらくことにある。

そして、シンボル化(記号化)の過程においては、“もの”は、心の内に表わされようが、〈ことば〉として外に表わされようが、事態と相容れぬことにならぬよう、「矛盾なきこと」を目ざさねばならないのである。

さて、この「ローウェル講演」に述べられた限りのことではあるが、パース

とロックとのアナロジーをもう少し進めてみたい。

ロックの記号論（セーメイオーティケー）σημειωτική においては、記号とはまず観念であって、「心が考察するものであり、心に顕れるもの」(IV. XXI. §4)¹⁰⁾なのである。そうすると、「観念という記号」は、事物と心との間に介在するなにものかであると考えることができる。つまり、それがなければ、心が「事物を理解したり、事物についての知識を他の人々に伝えたり」(ibid.) することのできなくなるようなもの、なのであるから、たしかに「観念という記号」は一種の存在物だ、ということになる。事物を心に知らしめるものということにおいて、記号という介在物はまた、ある種の機能を果たすもの、つまり「道具」でもある。それゆえ、「観念という記号」は事物と心との間に介在して、事物を心に「表わす」ものとして、いわば鏡のような役割をするもの、と見なすことができよう。

一方、〈人間〉も〈ことば〉も等しくシンボルとして相関的にとらえるペースは、ロックにおける〈ことば〉の、「観念」に対する、従属的副次的な地位から解放し、〈ことば〉にもシンボルとしての独自の役割と権利を与えた、と見なすことができるであろう。ロックは「観念」なるものを見つめすぎた(I. I. §8)ので——だからこそ、〈認識論〉の扉を開くという大事業を行なうことができたのであるが——シンボルとしての〈ことば〉のはたらきへの配慮がうすれ、〈ことば〉すなわち「内部観念の外部標印」(outward Marks of our internal Ideas) (II. XI. §9) ということになったのであろう。

くりかえして言えば、ロックの記号論において、事物を心に表わす記号が「観念」であり、心の中にある観念を記録したり、他に伝えたりする記号が〈ことば〉なのであった。記号とは、このように、内へと向かう「観念」と、外へと出る〈ことば〉というように、なんらかの情報の担い手として、すなわちメディアとして、とらえ直すことができるものではなからうか。その点でペースは、メディアとしての記号のはたらきを重視しているといえよう。このことは、彼が「インタープリータント」(「解釈項」) interpretant とよぶきわめて独創的で包括的な概念を導入、提起するところに示されている、と行うことがで

きる。

7. 「インタープリタント」としての魂

〈人間〉も〈ことば〉も、実はこの「インタープリタント」なのである。「シンボルとは自己のうちに、もう一つのシンボルを作り上げていくもの」(p. 497)であるから、一つのシンボルは他のシンボルによって説明され、展開され、取って代わられる。このようなシンボルのはたらきがすなわち「インタープリタント」なのである。パースはこの着想を演繹推論から、あるいはむしろ、親子関係のアナロジーから得ているようである (p. 497)。たとえば三段論法は、二つの文を、すなわちシンボルを、結合させることによって新たなシンボル、すなわち結論を導き出してくる推論なのである。〈ことば〉と〈人間〉との相互関係でいえば、互いに「インタープリタント」として作用し合い、「教育し合って」、情報獲得の可能性を増大させる、ということになるのである。

この「インタープリタント」なるものは〈ことば〉においては見やすいが、〈人間〉においては、どのようなものとしてはたらくのであろうか。パースは「認識の未来像、将来の自分、話し相手、書いている文、自分の子ども」(p. 498)などが〈人間〉のインタープリタントであるとして、きわめて広くとらえようとしている。したがって、〈人間〉は「関心を抱いている対象についてはその外延を示し、認知したり感情を持ったりする対象についてはそれを内包する。そして、形象を具現し、理解しやすいものに変える」(p. 498)のである。自ら「インタープリタント」である人間は、また、インタープリタントである他のシンボルによって説明され、解釈されるという、すぐれて多面的で、かつ重層的な存在なのである。

このようにして、〈ことば〉との相関関係によってとらえられた〈人間〉は、さらに、〈ことば〉をも自らのうちに含む「インタープリタント」であること、しかも、それを自覚する存在であることによって、現象世界の主人公としての地位を占めることができるのである。ここに、〈人間〉がシンボルであり、シンボルはメディア（媒体）であり、メディアはインタープリタントとして

はたらく、という一連の関係を示す図式が思い浮かんでくることであろう。それゆえ、シンボルたる〈人間〉はインタープリタントとしてはたらくところにその本質を求めることができるのである。

〈人間〉は、〈人間〉にとってメディアではあるが、メディアとしてのみはたらくのではない。むしろ、インタープリタントとしてはたらくのである。このことは、コミュニケーションにおいてよく示される場所である。パーズは言う。

「全幅の信頼を寄せている友と思想や気持ちを語り合うとき、次第に、私の感情は友の内面に立ち入り、友の感じていることがそのまま、はっきりわかるようになる。そのようなときには、さながら、友の頭脳の中にも私は生きているのだ、と言えるのではなからうか。まことに、そこには私の肉体的な生はなく、あるのは、私の魂、私の感情、私の思想、そして私の関心なのである。もし、そのようなことがないとしたら、人間とは、何とつまらぬものになり果ててしまうことだろうか。」(p. 498)

このように〈人間〉は、〈他者の中に己れを見、己れを感じ取ることのできる存在〉であって、ここにこそ、人間のアイデンティティがあるのだといえよう。パーズはこのような「共感」*sympathy* や「連帯感」*fellow feeling* に高い価値を付与しているが、これらはまさに、「己れの延長」*outreaching identity* (p. 498) とよべるものであろう。ここにはまた、〈人間〉の本質である「魂」の真の姿を見ることができる。「人間性もっている信じがたい力は、〈新たな人間の魂〉 *a new human soul* を作り出すこと」(p. 497) にある、とパーズは言うが、〈魂〉なるものは、己れをインタープリタントとして自覚するものであり、しかも、「シンボルが真である限りはインタープリタントを有している」(p. 500) のであるから、シンボルたる〈魂〉は、不死なるものとしてとらえることのできるものなのである。

以上の論旨をロジックとして要約すると、「人間とは何か」という問いに対して、まず〈人間〉をシンボルと見定め(仮説推論)、次いで人間意識を分析し、

〈ことば〉との対比をとおしてシンボルのはたらきを検証し(帰納推論), その結果, シンボルであるところの〈人間〉は, 己れをインタープリタータントとして自覚する〈魂〉であることが立証(演繹推論)されたことになる。言い換えれば, パースの人間論は, シンボル論を介して, 「魂不滅論」へと展開されるものである。

まことに, シービオクの言うように, 「魂」とは《シンボルの体系》としてとらえることのできるものなのである¹¹⁾。

注

- 1) 残念ながら, 第12回目の講演のマニュスクリプトは発見されていない。
- 2) 「〈人間=記号〉論について」『城西人文研究』第11号参照。
- 3) 以下, (p.490) のように示すものは, すべて Peirce, C. S., *Writings of C. S. Peirce*, Vol. I. Indiana U. P., 1982. からの引用である。
- 4) 美しき修道女イザベラが婚前交渉の科で死刑に処せられようとする弟のために, 裁判官アンジェロに助命を乞い求めるが, アンジェロはイザベラを見初めて欲情に駆られる。このような遣り取りの際のイザベラの台詞である。
- 5) 「脆い脆い硝子だと解り切っている身とも知らずに」(新樹社版)
- 6) 「自分がガラスのようにもろいものであるというたしかな事実も悟らず」(白水社版)
- 7) “man’s glassy essence” なる 〈ことば〉は, パースの好みとみえて, 1892年の『モニスト』*The Monist* 誌上の論文の表題でも用いている。
- 8) この三分法は対象との関係における記号の分類であるが, 本講演のなされた翌年の1867年のことであった(*Collected Papers of C. S. Peirce*, 8 vols. Harvard U. P., 1931-58. の第II巻 § 247~ § 249)。しかも, この分類は1904年10月12日のウェルビー夫人への手紙の中でもパース自身が言及しているものである。(*Semiotic and Signifcs—The Correspondence between Charles S. Peirce and Victoria Lady Welby*—Ed. C. S. Hardwick, 1977. p. 33.)
- 9) *Measure for Measure*, 第II幕, 第2場, 120.
- 10) John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding* (『人間知性論』)。この表記はこの書からの引用を示す。
- 11) パース記号論の研究者としても著名なアメリカの記号学者・言語学者 Thomas A. Sebeok 氏が, 1985年「ICU 言語科学夏期講座」において, 筆者の質問に対して述べたことばである。

Bibliography

- Peirce, C. S., *Collected Papers of C. S. Peirce*, 8 vols. Harvard U.P., 1931-58.
- Peirce, C. S., *Writings of C. S. Peirce*, Vol. I. & II. Indiana U.P., 1982 & 84.
- Peirce, C. S., (ed.), *Studies in Logic*, John Benjamins Publishing, 1983.
- Hardwick, C. S., (ed.), *Semiotic and Signifcs*, Indiana U. P., 1977.
- Eisele, C., (ed.), *Historical Perspectives on Peirce's Logic of Science*, 2 vols. Mouton, 1985.
- Freeman, E., (ed.) *The Relevance of Charles Peirce*, The Hegeler Institute, 1983.
- Hookway, C., *Peirce*, Routledge & Kegan Paul, 1985.
- Eco, U., *Semiotics and the Philosophy of Language*, Macmillan Pr., 1984.
- Eco, U. & T. Sebeok, (ed.), *The Sign of Three: Dupin, Holmes, Peirce*, Indiana U. P., 1983.
- Sebeok, T., *The Sign & Its Masters*, Univ. of Texas Pr., 1979.
- Sebeok, T., (ed.) *Sight, Sound, and Sense*, Indiana U. P., 1978.
- Singer, M., *Man's Glassy Essence*, Indiana U. P., 1984.
- Pharies, D. A., *Charles S. Peirce and the Linguistic Sign*, John Benjamins Publ., 1985.
- Mertz, E. & R. I. Parmentier, (ed.), *Semiotic Mediation*, Academic Pr., 1985.
- Innis, R. E., (ed.), *Semiotics: An Introductory Anthology*, Indiana U.P., 1985.
- Elam, K., *The Semiotics of Theatre and Drama*, Methuen, 1980.
- Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford U. P., 1975.
- Mackie, J. L., *Problems From Locke*, Oxford U. P., 1976.
- Dunn, J., *Locke*, Oxford U. P., 1984.
- Tillyard, E. M. W., *Shakespeare's Problem Plays*, Penguin Books, 1985.